

『古今和歌集』における「宿」の歌について

佐田公子

はじめに

『源氏物語』「夕顔」の巻で、光源氏は大弐の乳母を見舞うべく五条の乳母の家を訪れる。その隣家が、かの夕顔の隠れ家なのだが、次の引用文は、光源氏が垣間見たその粗末な隠れ家の描写である。

御車もいたくやつし給へり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむと、うちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は葎のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなさ住まひを、あはれに、^①いづこかさしてと思ほしなせば、玉の^②台も同じことなり。

傍線部は引歌表現で、①が『古今和歌集』雑歌下 987番歌「世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる」^①を踏まえ、②が『古今六帖』第六「むぐら」「何せむに玉の台も八重律はへらむ宿に二人こそ寝め」を踏まえている。^②どちらも「宿」を詠み込

んでいる歌である。

この二つの引歌表現は、これから展開される光源氏と夕顔の物語のプロットを暗示する役割を持つ。但し、六帖歌の方は、場末の家や荒廃した某の院で、夕顔と逢瀬を遂げる光源氏のアバンチュールを主に暗示するが、古今集歌の方は、その先の物語の展開にまで作用していると言える。すなわち、右大臣家の四の君のうわなりうちに合わせて身を潜めていたところを、光源氏と出会い、某の院で物怪に取り殺されるといふ、誠によるべない夕顔の運命を象徴するだけでなく、夕顔の遺児玉鬘の筑紫漂泊や、六条院に迎えられてもなかなか父子対面を果せず、さりとて六条院の住人にもなりえない玉鬘の漂泊の身をも暗喩しているのである。まさにスケールの大きい引歌表現と云うことができる。

さて、このように夕顔の物語を象徴する①の引歌は、その初出である『古今集』ではどのような位置にあったのだろうか。因みに

『古今集』において、「宿」が詠まれている歌を調べてみると、「宿」を客観的抽象的に認識していく過程をみる事ができる。またさらに、『古今集』編纂時点における撰者達の「宿」を視点にした文学的営為も目のあたりにすることができる。小稿では、この点を明らかにし、そのような認識を齎したいくつかの要因を探っておくこととする。

一 『万葉集』の「宿」と『古今集』の「宿」

『古今集』における「宿」を追う前に、『万葉集』では「宿」がどのように詠まれていたかを確認しておこう。「ヤド」の万葉仮名表記には様々ある。まず、「宿」表記のものは、

あしひきの山行き暮らし宿借らば妹立ち待ちて宿貸さむかも

(巻七 1246 作者未詳)

のように「借る」を伴って、宿泊する建物それ自体を指すが、用例は5例のみである。また、動詞「ヤドル」の「ド」は乙類表記、名詞「ヤド」の場合は甲類表記だったが、後に混同されるようになる。「宿」以外の「ヤド」の表記を多い順にあげると、「屋戸」(58例)・「屋前」(34例)・「夜度」(14例)・「屋外」(4例)・「屋度」(3例)のほか、「夜杼」「夜等」「耶登」「家門」「屋所」「室戸」「室」(各1例)である。³⁾「屋戸」「屋前」の例が多いことから、元来は家の戸や戸口付近、建物の外側、庭前の意で用いられていたと言える。⁴⁾

また、

秋萩は咲くべくあらし我がやどの浅茅が花の散りゆく見れば

(巻八 1519 穂積皇子)

我がやどの花橘は散りにけり悔しき時に逢へる君かも

(巻十 1973 作者未詳)

などのように、「わが」を伴って用いられる例が68例(全体の54%)あり、萩・浅茅・花橘・梅のほか、桜・山吹・瞿麦・藤・紅葉・群竹・松・籬などの庭前の様々な植物や雪・露・鶯・雁なども詠まれている。

『古今集』における「宿」は、36例(うち「わが」を伴うものは13例)である。その中でも多いのは、万葉以来踏襲されている「宿」で、

やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり

(34 春上 読人知らず)

家にふぢの花のさけりけるを、人のたちとまりて見けるを
よめる

わがやどにさける藤波たちかへりすぎがてにのみ人の見るらむ

(120 春下 躬恒)

朱雀院のをみなへしあはせにのみてたてまつりける

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむやどにうゑて見ましを

(235 秋上 忠岑)

のように庭前をも含んだ宅地や建物を指している場合が多い。詠み込まれる景物も、万葉以来のものが多く、特に平安になってから珍重された女郎花・藤袴・郭公のほか、松虫なども見える。これらの例は、言うまでもなく一般に四季歌に散見するが、秋歌・冬歌・雑歌に属する次の読人知らず歌

あきはきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

(287 秋下)

わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなけれ

ば

あれにけりあはれいくよのやどなれやすみけむ人のおとづれも

せぬ

のように、寂寥感・孤独感を歌い、「宿」を外界とは隔絶した地として客観的に捉えるものも出て来る。そして、これをさらに発展させたのが遍昭である。

仁和のみかどみこにおはしましける時、ふるのたき御覽ぜ

むとておはしましけるみちに遍昭がははの家をやどりたま

へりける時に、庭を秋ののにつくりておほむ物がたりのつ

いでによみてたてまつりける

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらな

る

右は、光孝天皇の東宮時代、大和の布留の滝まで供奉した折、遍昭

の母の家の庭前を秋の風情に仕立てて東宮を迎えた時の歌。「人はふりにし」は、母が年老いたことを指し、折から秋の野になって荒れゆく様を詠んでいる。このような発想を開拓した遍昭は、先の287・322番歌の「道もなし」という表現からも影響を受けて、

わがやどは道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしま

に

ならへまかりける時に、あれたる家に女の琴ひきけるをき

きてよみていれたりける

わびびとのすむべきやどと見るなへに歎きくははることのねぞ

する

とも詠んでいる。いづれも「宿」の置かれた状況を、外側から客観的に把握していると言える。また、

ものへまかりけるに、人の家にをみなへしうゑたりけるを
見てよめる

をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりた

てれば

は、秋歌だが、女郎花に女を髻髻とさせて、男が訪れなくなつたこ

とを暗喩し、後に歌語「荒れたる宿」⁶が成立するもともなつてい

る。

このような恋歌に繋がる「宿」の歌がある一方、

河原のおほいまうちぎみの見まかりての秋、かの家のほと

りをまかりけるに、もみぢのいろまだふかくもならざりけるを見てかの家によみていれたりける

近院右のおほいまうちぎみ

うちつけにさびしくもあるかもみぢばもぬしなきやどは色なかりけり

りけり

(848 哀傷)

題しらず

よみ人しらず

なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ

(855 哀傷)

などは、主が亡くなっても残っている宿に、故人を偲び、色付きが

悪い紅葉や冥界を行き来する郭公に託して詠んでいる。また、

みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ

む (950 雑下 読人知らず)

のように、遁世を志向し、都と隔絶した土地に宿を求める歌も出て

来る。さらには、

たちばな

葦引の山たちはなれ行く雲のやどりさだめぬ世にこそ有りけれ

(430 物名 をののしげかげ)

のように、冒頭で掲げた引歌の『古今集』雑歌下987番歌と同様な漂

泊の思いを述べる歌も見える。また、

家をうりてよめる

伊勢

あすかがはふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆく物にぞ有

りける

(990 雑下)

では、生々流転の象徴である「飛鳥川」の「淵」に「扶持(舅姑の葬礼のための妻からの援助)」を、また「瀬に」に「銭」を掛け、現実に即して無常観を表明している。

このように見て来ると、万葉に引き続き『古今集』でも、庭園をも含めた貴族の邸宅における瞩目詠に「宿」が詠み込まれてはいるが、次第に「宿」自体を客観的に把握し、秋冬の寂寥感や閨怨の情を詠ずる素材になっていったと言いうことができよう。

三 雑歌下の「宿」の歌群

さて、このような「宿」への客観的な把握を歌群として具現させたのが『古今集』雑歌下の981～990番歌である。それを次に掲げる。(前節で挙げた例歌と重複するものは、初句のみ記載した。)

題しらず

よみ人しらず

いざここにわが世はへなむ昔原や伏見の里のあれまくをし

(981)

わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてる

かど

(982)

きせんほうし

わがいはは宮このたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

(983)

あれにけり……

よみ人しらず

(984)

ならへまかりけるは時に、……

わびびとの……

(985)

はつせにまうづる道にならの京にやどれりける時よめる

二条

人ふるすさとをいとひてこしかどもならの宮こもうきななりけ

り

題しらず

よみ人しらず

世中はいづれか……

相坂の嵐のかぜはさむけれどゆくへしらねばわびつつぞぬる

(988)

風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもしらずなりぬべ
らなり

家をうりてよめる

伊勢

あすかがは……

(990)

『古今集』の長い研究史の中でも、集としての統一体を厳密に読
み解いていこうとするものに構造論・排(配)列論がある。この論
の立場から、右の歌群を分析した先学の見解を挙げると、松田武夫
氏は、「遁世(981～983)・漂泊(984～990)」、久曾神昇氏は「庵住(900
～983)・廢屋(984～986)・無宿(987～990)」、小島憲之氏・新井栄蔵

氏は「宿」⁹、片桐洋一氏は、981～983番歌を「この世に住み果てようと
した仙人や神や法師の歌」、984～990番歌は「住むべき『宿』を詠み、
所詮は『仮の宿』であると言う」とされる。また、竹岡正夫氏は、
特にこれらを歌群として規定してはいないが、981番歌の注に、「千
載佳句」上巻、人事部の閑居・閑意・閑放・閑適・閑興・閑遊・閑
官・閑散あるいは下巻の隠逸部と同類である」とされる。このよう
な諸氏の構造分析は一応は納得がいくのだが、さらにこの歌群内を
検討していくと、より周到的な構成意識をもつて配列されていること
が分かる。

まず、981～983番歌は、別稿で検討したように、菅原伏見・三輪の
山もと・宇治山の地に居住することを宣言した歌で、正史である
『日本書記』におけるそれぞれの伝承を基盤に、和歌表現や言葉の配
列の妙を醸し出した文学的営為であったと言える。詳しくは別稿に
譲るが、ここではその最後にまとめて図示した部分を、以下の歌群
の検討のためにも掲げて、簡単な説明を加えておこう。

981	藤原伏見	臣下	殉死	女(述懐)	臥し身	惜し
982	三輪の山もと	大物主神	女(勧誘)		とぶらひ	恋し
983	宇治山	皇子	自殺	男(謙遜)	来ませ しかぞ 住む	憂し

まず、地名の背景から見ると、三首の中ほどの982番歌は、天皇神

とも関連の深い大物主神を祭る三輪山の歌であるが、これを中心に、981番歌が垂仁天皇のために殉死した臣下田道門守の伝承をもつ地であるのに対し、983番歌が自殺することによって長兄（仁徳）の即位を促した皇太子菟道稚郎子の伝承をもつ地であるというように対応関係にあると言える。また、和歌表現の面からは、981番歌が「伏見」に「臥し身」を掛け、それが女性の閨怨の情を述べる「荒る（離る）」に繋がり、女の述懐歌ともとれるのについて、982番歌が女の勧誘・挑発ともとれる表現をとっていること、さらに983番歌では、「辰巳」に「論語」子卒の恭遜の意が含まれ、982番歌とは対照的な男性の謙遜の辞になっていることが指摘できる。

981～983番歌が、遁世者が自分の居住地を述べる歌であったのに対し、984～986番歌は、廃屋を外から捉えたり、旧都奈良への感慨を述べた歌である。この三首の構造を詠歌内容や歌語から考えて図示すると次のようになる。

984	住人のいない一軒屋	不定	あはれ
985	かろうじて住人がいる家	奈良又は京と奈良の間	嘆き
986	住人がいる旧都全体	初瀬詣で途中の奈良	憂し

廃屋に住む雅な女との交流という話型に類似した中ほどの985番歌を中心に、住人がいるかないか、一家屋を対照にしているか旧都

全体を指しているかで、984と986番歌が対応していると言える。また、984番歌は、土地を特定してはいないが、985番歌は、奈良もしくは京と奈良の間、986番歌は初瀬詣で途中の奈良へと、南下する土地の順に配列されている。さらに、「あはれ」「嘆き」「憂き」という感情を表出した言葉の連関性も配列上考慮されていたとも言えよう。985・986番歌は、驛旅歌としても扱えるのに、雑歌下のこの歌群に入集したのは、撰者達に「宿」の歌群を構成しようとする意図があったからだと言えよう。

次の987～989番歌は、984～986番歌までの廃屋や遷都の実態を通して得られた生々流転の世の理を認識する境地を歌った歌である。987番歌の「行きとまる」を受けて、988番歌では、人に逢えるはずの逢坂山なのに会えずに行くえが分らず侘びて寝ることを歌い、989番歌では、988番歌の「風」を受けて空しい塵の如き身を想起し、行くえも分からぬ身の切なさを歌っている。殊に987番歌は初句が「世の中」から始まるので、雑歌下の「世の中」詠28首の中に組み入れることも可能であったろうが、結局、当該歌群中に収めたのは、編集の行程で、雑歌の部立に「宿」の歌群を構成しようとする意識が芽生えたからであろう。

987	世の中	いづれ	行きとまる	宿
988	相坂	風	行くへしらず	寝る

989 風 ちりの身 行くへしらず 有りか

さて、歌群最後の990番歌は、永住できずに家を売却したことを歌った歌で、永住を宣言した当該歌群冒頭の981番歌とは対応関係にあると言える。また、自己の庵の場所を宣言した982・983番歌と、漂泊の思いを歌った988・989番歌は、やはり内容上対比的関係になっていると言える。さらに982番歌の三輪山及びその背景にある神婚伝承は、988番歌の逢坂(山)の「逢ふ」にも通じていることも指摘できよう。以上のように当該歌群を詳しく分析してみると、詠歌事情や背景、和歌表現や歌語など様々な面から綿密な構成意識をもって編まれていたことが分かるのである。

三 「宿」の認識と「宿」歌群の生成要因

それでは次に、「宿」に対する客観的抽象的認識の発達やそれを歌群として構成しようとした要因について考えたい。

古今集歌の表現は、長い漢詩文隆盛の時代を経て獲得されたものである。この「宿」の歌の場合にも、先行漢詩文からの影響が考えられる。例えば、次のような詩がある。

林泉旧邸久陰陰 今日三秋錫再臨 宿殖高松全古節 前栽細菊
吐新心 荒涼靈沼龍還駐 寂歴稜岩鳳更尋 不異沛中聞漢筑
謳歌濫続大風音

〔凌雲集〕32 奉和聖製宿旧宮心製一首 藤原冬嗣
君主一去池館廢 四海為家感旧来 昔從驂駕曳裾出 今配龍輿
鏘佩迴 簷前枯柳看後樹 岸曲長松聽初栽 漢筑□□□□尺
況乎沛唱復相催

〔文華秀麗集〕47 奉和宿旧居之什 一首 野岑守
右の詩からは、嵯峨帝の旧邸行幸における君臣和楽の詩作の場が想定できる。君主が去ってから荒廃してゆく邸宅、漢筑(琴に似た楽器)の響きなどは、『古今集』985番歌の世界に近い。

通世明皇出帝畿。移居旧邑遣歲時。忽從此地昇雲後。唯
有空居恋寵姫。訪道初停羅綺艷。剃頭新比丘尼。嬌心欲
識乖□縛。弱体那堪着草衣。山殿風声秋梵冷。漢窓月色晚禪
悲。焚香持誦寒林寂。坐尚蒼天怨別離。

〔経国集〕卷第十 梵門 七言。和藤是雄旧宮美人入道詞。
一首。

右は美女の出家遁世を詠じた詩である。旧邑に移り住んで仏道に徹する美女の寂しさは、この世を侘びて住む女の茅屋を歌った985番歌に通じている。

以上のような詩想は、奈良朝の『懐風藻』には見当らず、平安勅撰漢詩集において発展した発想と言えようが、これが和歌世界にも積極的に取り込まれていったと言いうことができる。

次に、唐絵屏風の絵柄にも人家が描かれていたことも忘れてはな

るまい。

緑柳紅桜繞小廊 不見家中他事業

〔菅家文章〕卷四319 〔僧房屏風 野庄〕

茅屋三間竹数竿 便宜依水此生安

〔同右 321 閑居〕

不為幽人花不開 万株松下 一株梅

〔菅家文章〕卷五362 〔田家閑適 屏風画也〕

などにみるように、唐絵屏風の画讀としての漢詩では、絵柄を客観的に詠ずる視点が獲得されていたと言えよう。こうした視点が、『古今集』成立前後から台頭してくる大和絵屏風及びその画讀としての屏風歌にも継承され、

海づらなる家に、藤の花咲きたり

わが宿の影とも頼む藤の花うちより来とも波を折らるな

〔伊勢集 65〕

山辺近く住む女どもの、野辺に遠く遊びはなれて、家のか
たを見やりたる

野辺なるを人もなしとてわが宿に峰の白雲おりやゐるらん

〔同 221〕

など、人家や山里の家の絵柄を詠んだものが散見するようになる。屏風絵という独自の視覚的な広がりをもった世界を、外側から客観的に把握して捉える文学的視座が築かれたのである。¹⁶⁾

ところで、「宿」への客観的抽象的把握を促した社会的・精神的

背景としては、いうまでもなく知識人の間に浸透していた仏教思想との関連が考えられよう。奈良朝後期の仏教界と政界との癒着を一掃するためにも遷都を決意した桓武帝であったが、山林苦業僧には本寺からの給を奨励したり、国稲を給する政策をとるなど、依然、仏教を手厚く保護している。また、最澄、空海が天台・真言密教を広め、鎮護国家の修法を確立するに至っては、新たな平安仏教が貴族層にも及んでいった。こうしたなかで生々流転を悟る無常観は、戦乱の中世ほどの切迫感はないものの、平安知識人の心の底に確実に根づいていたと言えよう。先に挙げた『古今集』981～983番歌などは、俗世から離れた隠逸の生活を求める遁世者や山林修業僧のものであった。また、次の984～986番歌などは、平安遷都から百年余りの旧都奈良の荒廃ぶりを目のあたりにした正に生々流転の現実を実感した者らの歌であった。さらには定めがたいこの世の宿りや寒風を忍ぶ漂泊の身、風前の塵の如き身、親からの財を手放さねばならなかった身など、時代や物事の流れに押し流される人の心に収斂していくのである。

このような無常の世への思いは、雑歌下の巻頭から二十八首目までの「世の中」詠歌群にまとめられていた。そして、その「世の中」詠歌群以下の歌は、「世の中というもの」という命題に対する具象化であった。¹⁸⁾ すなわち配流・謫居・解任・流離・疎遠・交友などの歌に継いで、「宿」を視点にした歌群を構成したことは、人の居住地の

変転がいかに無常観を伴って捉えられていたかを表していると言えよう。また、それらは決して悟りの心域にまでは達するものではなかったが、嘆訴することによって、文学的昇華を果たしたと言えよう。

『古今集』は勅撰である。長い漢詩文台頭の時代を経て、和歌を公的な場の文学として高めようとする国風化政策の一環でもあった。平城京を離れて百余年、奈良の都をこよなく愛した平城天皇の歌

ふるさととなりにならのみやこには色はかはらず花はさきけ
り (90 春下)

をも入集する。限りなく流転する民の居所への嘆きを帝の前に嘆訴することは、その流転を自らも悟りつつ普く受容する聖帝の偉大さを示すこととなるのである。そしてまた、これを逆に言えば、一世紀も安体な平安の王城そのものを讚美することになったのである。

結 び

以上、『源氏物語』夕顔の冒頭の引歌表現を契機に、『古今集』における「宿」の歌を探ってみた。

わが宿は花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらむ

(幻)

最愛の紫の上を喪った次の年の正月に、光源氏が詠んだ歌である。

己が王権の宿と定めたはずの六条院が崩壊してゆく果てにあったものは、紫の上の死であった。宿はあれども主たる紫の上はいない。春の到来は、主の喪失を物語るにすぎない。そして、この年をもって光源氏は物語の舞台から消えていく。「いづこかさして」の引歌のテーマは、夕顔の物語に留まらず、光源氏自身の生にも回帰し、さらに続編の浮舟へと継承されていくことになる。

注

- (1) 「いづこ」の本文をとるものは、基俊本・元永本・伝公任本・雅俗山庄本。「いづく」の本文をとるものは建久二年俊成本。「世の中はどこを指してわが宿と言えるのだろうか。行き着いたところをわが宿と定めるまでだ。」の意ととれる。
- (2) 恋歌における「葎の宿」では、『伊勢物語』三段「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも」が、『源氏物語』が書かれた当時としても最も人口に膾炙されていたと考えられる。但し、『古今集』にはない。なお、①②の引歌表現の指摘は、伊井春樹氏編『源氏物語引歌索引』(笠間書院 昭和52・9)
- (3) 「夜杼」「夜等」「耶登」が乙類表記。
- (4) 片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院 1996・6
- (5) この歌については、岩井宏子氏「古今集九八五番の歌「わび人の」歌の背景」(『甲南大学古代文学研究』平成8・12)に詳しい。
- (6) 歌語「荒れたる宿」については、平野美樹氏「荒れたる宿考——『蜻蛉日記』における『主題的真実』の背景——」(『中古文学』第六十三号 平成11・5)がある。

- (7) 松田武夫氏『古今集の構造に関する研究』（風間書房 昭和40・9）
- (8) 久曾神昇氏『古今和歌集成立論 研究編』（風間書房 昭和36・12）
- (9) 小島憲之氏・新井栄蔵氏校注 岩波新古典文学大系『古今和歌集』（1989・2）。筆者も、「宿」の歌群と考える。
- (10) 片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』（講談社 平成10・2）
- (11) 竹岡正夫氏『古今和歌集全評釈』（右文書院 昭和51・11）
- (12) 拙稿「『古今和歌集』雑歌下 菅原の里・三輪の山もと・宇治山の歌（981～983）をめぐって」（『国文目白』第39号 平成12・2）
- (13) 『日本書記「崇神記」』では、三輪山の神は天皇霊であり、皇位継承を決定するほどの権威を持っていた。（一ノ宮英生氏「三輪山考」（『上代文学会報』4号 昭和51・12）。
- (14) 岩波新古典大系（注9）の脚注に示すように、『経国集』「奉和詠塵」詩群の影響も考えられる。
- (15) 拙稿「古今和歌集雑歌下「世の中」歌群の生成について」（『研究と資料』第41輯 平成11・7）において、「世の中」詠二十八首の意図と意義について検討した。
- (16) 増田繁夫氏「古今和歌集と屏風歌」（『一冊の講座『古今和歌集』有精堂 昭和63・3 所収）
- (17) 速水侑氏『日本仏教史 古代』（吉川弘文館 昭和61・2）、『類聚国史』仏道十四 度者。
- (18) 注14に同じ。

〔引用本文〕 万葉集Ⅱ角川文庫、万葉集以外の和歌は全て『新編国歌大観』による。源氏物語Ⅱ小学館古典全集、凌雲集Ⅱ本間洋一編「凌雲集索引」和泉書院、文華秀麗集・菅家文章Ⅱ岩波古典大系、経国集Ⅱ群書類従第八輯。